

創価大学名誉博士号受章記念講演会

2012年4月2日 第42回創価大学・第28回創価女子短期大学入学式

程 永 華

この美しい創価大学のキャンパスにも、桜が咲く季節となりました。このような佳き日に、私は、創大の先生方、学生の皆さん、特に新生の皆さんと共に、ここに集えましたことを大変うれしく思っています。

また、創価大学より名誉博士号を授与していただいたことに、心から感謝いたします。創大の卒業生として、身に余る光栄です。

創大は私の母校です。創大を訪れるたびに、学問を志した青年時代のことが思い出されます。ここには新中国最初の正規留学生としての青春の記憶が刻まれ、中日友好の多くの逸話が記されています。ここで、私と創大のご縁について触れたいと思います。

1972年、中日の国交正常化が実現しました。翌73年、私は留学生の第1陣として来日したものの、当時は両国間に教育協定が結ばれておらず、私たちの学習環境は整いませんでした。ちょうどそのころ、池田先生が74年12月に訪中し、周恩来総理と会見されました。ご帰国後、私たち留学生の実情を聞いた先生は、すぐに創大に正式に受け入れることを決めてくださいました。そして特別なカリキュラムを組み、私たちの勉学に対し、親しくも、こまやかな配慮をしてくださったのです。

当時の光景は今でもありありと目に浮かびます。37年前のこの季節に私たちは創価大学に入学しました。

池田先生はその時、滝山寮の入寮式に出席されました。そして、“桜吹雪”のなか、私たちを栄光門から文系校舎へと案内し、そこで出会った教員や学生たちに紹介してくださいました。また日本の桜の文化について語られ、周総理との会見でも桜が話題になったことを振り返るとともに、キャンパスに「周桜」を植えることを提案されました。

私たちは、この時から、創大という素晴らしい教育環境の中で、教員の方から厳しくも優しい指導をいただき、日本に関する学問の研さんに努力を重ねました。また、多くの学友ができ、本当の心の絆を結ぶことができました。これらは私にとって人生の宝であります。

創価大学と中国との交流・協力がスタートしたのは、この時からでした。現在、創大は中国の多くの大学と友好交流協定を結び、国の重責を担う人材を次々に養成しています。

すでに両国の多くの創大卒業生が中国と日本の各分野で活躍し、両国の交流と協力のために務めています。ここで、中国大使館を代表し、深い敬意を込めて心からの感謝を申し上げます。

今年は中日国交正常化40周年にあたります。中国には「水を飲む時は、井戸を掘った人のことを忘れない」という言葉があります。私たちは、この佳節にあたり、戦後の両国関係の再建と発展のために、たゆまぬ努力を払った先輩のことを忘れてはなりません。

池田先生は、その中であって傑出した代表であります。68年9月、先生は日中国交正常化提言を発表し、両国関係がなお緊張状態にある中、率先して

「日中の国交正常化」

「中国の国連加盟」

「日中貿易の促進」を提案されました。

“一石で千重の浪を立てる”という諺がありますが、池田先生の提言は中日関係の固い氷を破り、関係正常化を実現し、平和友好の道を開く上で、重要な役割を果たしました。

国交正常化後の74年5月、池田先生は初訪中されました。そして中日間に平和の「金の橋」をかけることを提起し、こう述べられました。「金は『生』であり、生き抜いていく、光り輝いた生命のことであり、平和という意味であります」と。

私たちは、両国各界の共同の努力を経て、この40年間、中日間に堅固な「金の橋」が築かれたことを喜んでいます。

中日間では、すでに4つの政治文書が相次いで調印・発表され、両国関係を発展させる政治的基礎が築かれました。国交正常化当初、中日間の貿易額はわずか10億ドルで、人の往来は1万人にすぎませんでした。この40年の間に両国の貿易は300倍、人の往来は500倍以上増えました。さらに247組の友好都市関係が結ばれ、文化の往来は日増しに密接になっています。

両国の利益は深く溶け合い、結びつきは、かつてないほど緊密になっています。中日関係の急速な発展は、両国人民に重要な利益をもたらし、地域と世界の安定、発展、繁栄にも重要な貢献を果たしています。

池田先生はかつて、“過去の歴史を鏡にして初めて、現在を検証し、未来を映し出すことができる”と述べられました。国交正常化以後の中日関係における大きな成果を回顧して、私たちは両国の末永い友好への信念を一層固め、戦略的互惠関係に力を尽くす勇気を一層強め、両国人民の感情を盛り上げる意欲を一層深めています。

孔子は「四十にして惑わず」と言いました。中日関係は40年の風雨を経て、すでに新しい段階を迎えています。

私たちは次の40年、さらに未来を見据えて、「平和共存・世代友好・互惠協力・共同发展」に基づいた中日関係構築のために努力すべきであります。

そのために、常に次のことを心得ていきたい。

まず「決意」を持って両国関係の大局を守り、両国関係の大方向をしっかりとつかむこと。

40年前、両国の先人は、その遠見卓識によって、大同を求め、小異を残しつつも、中日国交

正常化を実現しました。

歴史と現実とは、あくまでも戦略的見地と長期的視点から、中日友好の大方向を堅持して初めて、両国関係は絶えず前進することを教えています。そこで私たちは、相手の発展を客観的、理性的に認識し、政治的な相互信頼を絶えず増進させ、中日間の4つの政治文書の原則と精神に照らして、長期的かつ健全で、安定した中日関係を建設すべきです。

次に「勤勉」によって、両国の互惠・協力を強固にすること。

実務協力は常に中日関係を構成する重要な部分であり、両国関係に尽きることのない原動力を与え、両国人民に実際の利益をもたらしました。

中国の改革開放から30年余りの間、日本は資金・技術など多くの分野で貴重な協力を寄せ、中国の近代化を支援しました。同時に中国の発展は日本にも重要なチャンスを与え、日本経済の回復と成長を推進したのです。

双方は、これからもそれぞれの発展の新たな趨勢に合わせて、世界の経済発展の新たな潮流を見ながら、絶えず新たな協力分野を探り、そのための新たな目玉と成長点を育てていきたい。そして、共通利益という“ケーキ”を大きくして、チャンスを共有し、共に発展・繁栄する道を歩むべきです。

また、「友情」によって、末永い友好の基礎をしっかりと固めること。

中日友好は両国の民間に厚い基盤があり、子々孫々の友好は両国人民の共通の願いです。中国と日本は地理的に近く、文化も相通じ、人文交流の独特な強みを持っています。私たちは、絶えず交流の形式と中身を豊富にし、共通の文化的価値観を深く掘り起こして、心の琴線に触れる人文交流を強力で繰り広げ、より多くの民衆の参加を得て、国民の友好的感情を近づけるようにすべきです。

さらに「英知」によって、お互いの意見の食い違いを上手に処理することです。

交流の密接な隣国である中日の間に、あれこれと矛盾や意見の食い違いがあるのは避けがたいことです。双方は大局に着目し、これまでの合意事項や共通認識を遵守し、お互いの関心事に配慮し、あくまでも対話・協議を通じて、それらを慎重かつ適切に処理すべきです。

中国のある詩人が、こう言いました。

「相悖り立てば、兄弟咫尺に近くも、相見ること得ず。相向かいて行けば、道人千里遠くとも終に相望むこと能う」

私たちがあくまでも同じ方向へ歩み寄りさえすれば、いかなる矛盾や意見の食い違いも解決することができます。

学生の皆さん、池田先生は創大の建学の際、「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」
「労苦と使命の中にのみ 人生の価値は生まれる」と、創大生に指針を示されました。

創大の先輩として、新入生の皆さんが創大に入って勉強できることに心からの祝意を表します。同時に、皆さんが在学中、学業に励み、進歩を求め、人生の理想と価値を探求するよう心から期待しています。

皆さんがもっと中国を知り、中日関係に関心を寄せ、将来、両国間に友好の「金の橋」をかける有能な人材になることを希望します。

数年後、創大を旅立つ時、「創大に入ってよかった」「勉強して充実した」と言えるよう、また10年、20年経ってもそう言えるような大学生活を過ごせるよう期待します。

ご清聴ありがとうございました。